

事物間の距離や関係性を再構築する建具の生態学的研究

田中義之^{※1} 千葉学^{※2} 海法圭^{※3} 鈴木岳彦^{※4} 秋田次郎^{※5}
菊地建介^{※5} 久津輪溪^{※5} 豊永嵩晴^{※5} 鉄穴口友李^{※6} 四方璃玖人^{※6} 木島凧沙^{※6}

概要 かつて日本では多種多様な建具を組み合わせて使うことで生き生きとした生活を実現してきた。コロナ禍以降、物理的距離だけでなく心理的距離である「距離感」のデザインが求められるなか、世界各地の事例から建具が司る事物間の多様な関係性をつぶさに観察し分析することを目的とする。まず世界各地の建具事例収集を行い、次に建具同士や建具と周辺事物との間で相互に影響を与え合っていると思われる事例について文献調査と仮説形成を行う。そして特に事物間の多様な関係性が形成されていると思われた世界各地の6事例について現地調査を実施し仮説の検証を行う。現地調査結果の考察から、これからの社会やそこでの人や事物間相互の生き生きとした関係性を考え設計するための視座を得る。

研究背景と目的

古くから日本人は多種多様な建具を考案し作り出してきた。木、竹、紙といった材料、大小様々な格子密度、気候や四季による違い、さらには異なる建具同士の重ね合わせなど、その多様性には驚くべき広がりがある。そしてこの多様性こそ、人と暮らす、街と暮らす、自然と暮らすといった生き生きとした生活を実現するための様々な関係性を繊細に調整するものであった。さらにはコミュニティを形成し固有の街並みを作り出すなど、そこには建具が司る事物間の多様な関係性があった。しかし経済成長に伴う効率化や大量生産、ライフスタイルの均質化が進むなかで、かつての建具の多様性は失われ、フラッシュ戸に代表されるような画一化が進みつつある。

コロナ禍において、社会の新しいスタンダードを作る必要性が語られるなか「人と2m離れる」という物理的距離のみならず、心理的距離といった「距離感」も私たちの生活に大きく影響し変化をもたらしつつある。

人と人との繊細な関係性を作り出し、その距離感を調整してきた建具にあらためて着目することは、新しい社会像を考える契機になると考える。

本研究は、日本国内だけでなく世界各地の建具事例を現地調査し、建具が人と人、人と街、人と自然の関係性をどう調整しているかを、建具の詳細といったミクロなスケールから地域における建具のありようといったマクロなスケールまで、様々なスケールで分析する。分析結果をビジュアルライズし、これからの社会における距離感や関係性を考え、設計する際に参照される資料としたい。

※1 東京大学 特任講師 ※2 東京大学 教授 ※3 海法圭建築設計事務所
※4 鈴木岳彦建築設計事務所 ※5 東京大学 修士2年 ※6 東京大学 修士1年

日本の豪雪地域における軽快な建具

概要：山形県鶴岡市山間部の豪雪地帯では、冬季に家を雪から守るためにススキを用いた雪囲いを家の外周部に設置する。雪囲いで乾燥したススキは屋根葺材に再利用されその後堆肥として畑に撒かれる、という大きな循環がある。外部建具はこのススキに守られることでガラスなしの軽快な障子戸として成立している。それにより雪への反射光を室内に拡散し湿度を透過する。(Fig. 9)

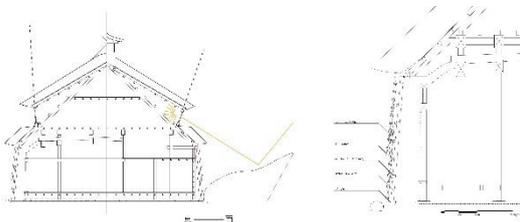


Fig. 9 住戸断面図

沖縄久米島における複層的境界面

概要：沖縄西部、亜熱帯海洋性気候の久米島では台風や季節風など強風の影響が大きいため、集落全体から家屋に至るまで様々なスケールで防風対策が施されている。街路構成、石垣、フクギ、ヒンプン、雨端（低く長い軒下空間）など集落全体で幾重にも重なる境界面を持つことで家屋の建具が防風対策から解放され、透明で軽快な建具として作られている。結果として外、雨端、縁側、座敷が一体となって、住人や近隣の人々が集い交流する場となっている。

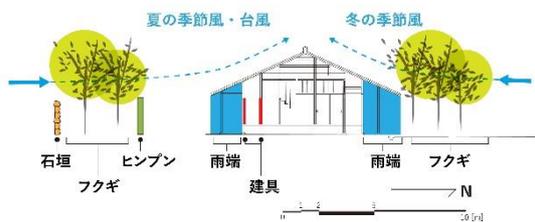


Fig. 10 住戸断面図

まとめと展望

現地調査を行った各事例に共通して、建具がそれ単体ではなく別の建具や別の要素と

相互に作用することである環境を作り出していることが確認された。例えばカンポンブロックでは建具や家具、敷物によってすき間の疎密を調節することで変化の激しい環境の中に快適な住環境を作り出し、久米島では建具を含む多層的境界面により、外部に開かれながら風が穏やかな交流空間が生まれている。(Fig. 11)

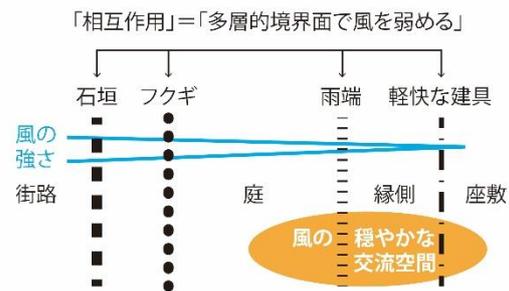


Fig. 11 久米島における相互作用

これらは建具の開閉や別の要素の調節によって都度微細にチューニングされる「ムラ」を持った環境だ。内外を明確に分け隔てるフラッシュ戸や高性能サッシでは実現しない「環境のムラ」は、人々の能動的で多様な居方やつながり方を許容する。コロナ禍以降、人々がより多様な距離感を求める現代における住まいや働く空間を考えると、そのような建具がもたらす「環境のムラ」はより一層の重要性を帯びる。

主な参考文献等

- ・江川直樹,岡絵理子,関西大学建築環境デザイン研究室:美しい両棲集落 カンポンブロック村の実測調査から, 2010
- ・下田一太:バオマタルオの伝統的木造民家の修復工事計画(<http://samborpreikuk.blog.fc2.com/blog-entry-52.html>), 2014
- ・アラブの住居,フリードリヒ・ラゲット 著 深見奈緒子訳, マール社, 2016
- ・上野勝久,野呂瀬正男ほか:日本民家園の雪囲い,川崎市立日本民家園,2003
- ・朴賛弼:沖縄における伝統的集住空間構成に関する研究, 関西大学東西学術研究所紀要 44, pp. 273-296, 2011-04